
禽、南瓜、あるいは、東京の、首都の、首都の東京の、ウラの、ウラはオモテで、コイントスニ

笹倉

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オモテ、ウラ、コイントス、林檎、南瓜、あるいは、東京の、首都の、首都の東京の、ウラの、ウラはオモテで、コイントスコイントス、コイントスコイン

〔ツノ〕

N 6258 Y

【作者名】

笠倉

【めりや】

あれ、よく、分かんな（じゅ）（びぢゅ）

死亡推定（前書き）

もし君が死んでたらどうするの？

うん、考えてきててくれたかな？

そうか、そういう考え方もあるよねー。

そうだよねー。

うん、君に意見は聞いてないんだけどね。

死亡推定

/ 「 」

林檎が一つ。

「東京は二つ存在する。コインに表と裏があるのと同じで、東京にも表と裏がある。埼玉はない。埼玉は、そうだな、首都じゃないからだ。そういうものなんだ。東京は二つ存在する。俺は一度、それを言った。東京は二つある。三度、言った。俺は煩わしいのが嫌いだから。俺は林檎だから、煩わしいのが嫌いだ。分かるか？」

そういうものなんだ。東京 裏の東京だ は、腐つてゐる。一度、潰すんだよ。いいか、よく聞け。一度潰す。一度潰す。一度潰す。俺は、林檎は、煩わしいのが嫌いだが、四度言った。もう一度言つ

林檎は動かない。しかし、林檎は喋る。

「東京を、潰す」

/ オモテ東京

その日、原宿の少女達は恐怖した。渋谷の少年達は恐怖した。

銀座のオンナ達は恐怖した。品川のサラリーマン達は恐怖した。本能的に、恐怖した。林檎だ、と誰かが言う。林檎だ、林檎だ、と少女は、少年は、オンナは、サラリーマンは、日々に言った。伝染だ。咳きは叫びに変わる。林檎だ、林檎だ、林檎だ、林檎だ！ ある者は座り込み、ある者は失禁し、ある者は気絶した。オモテはウラを見る事ができない。オモテはウラを見る事が出来ない。オモテはウラを見る事が出来ない。しかし、感じる。恐怖！ 圧倒的な恐怖！ 刃物の切っ先が向けられている。銃口がこちらを向いている、裏側から削られていく、そういう感覚。少女は恐怖する。少年は恐怖する。オンナは恐怖する。サラリーマンは恐怖する。林檎は動かない。オモテ東京に林檎は存在しない。君たちが知っている林檎は、林檎じゃないんだよ。

/ウラ東京/ドクター・パンプキンの診察室

ドクター・パンプキンはひどく緩慢な動きでキーボードのエンターキーを押した。モニターに文字列が表れる。フルミヤにはその文字列の意味が理解できない。ドクター・パンプキンはサイズの合っていないカボチャの被り物を揺らして、モニターからフルミヤの方へ視線を移した。どうつか、とフルミヤは聞いた。ドクター・パンプキンは答えない。フルミヤの方へ体を向けたまま、またエンターキーを押した。文字列が消える。エンターキー。文字列が表れる。エンターキー。文字列が消える。エンター、文字列、エンター、消える、エンター、表れる、エンター、消え、エンター表れる、エンター

ンタ消、エンター表、エン表、エン裏、裏、裏、オモテ。フルミヤの耳元で起動音がする。かちや、かちや、とエンターキーを連打する音も聞こえたが、やがて、消えた。フルミヤは喋らない。ドクター・パンプキンも喋らない。ウラはオモテに、オモテはウラに。フルミヤは今ウラに居る。なにが?

オモテだ。フルミヤは、オモテに行く。

/オモテ東京

フルミヤはコンビニ店員だ。注文されたタバコを取つて、客に渡す。金を受け取つて、釣りを渡す。ありがとうございました、と言つた。もう上がつていいよ、と店長が言つ。礼をして休憩室に戻り制服を脱ぎ私服を着替えて店を出る。ナイフは? ナイフはどこにある? ポケットだ。そのジーンズのポケットに、ナイフはある。フルミヤはコンビニ店員である。フルミヤは殺人鬼でもある。呼吸だよ、とフルミヤは笑う。呼吸みたいなもんなんだ、人を殺すのつて。

コンビニからの帰り道、路地裏。フルミヤは歩く。一人だ。フルミヤの感覚は研ぎ澄まされている。冬の六時半だ、もう辺りは暗い。しかしフルミヤの目には見えている。フルミヤは感じている。来るよ。女だ。二十五歳で、先日彼氏にフられて傷心、趣味はエアロビクスだ。フルミヤの感覚は研ぎ澄まされている。だから、分かる。

女が現れる。フルミヤの正面。フルミヤの方へ歩いてくる。二十五歳で先日彼氏にフられて傷心で趣味はエアロビクスの女だ。フルミヤも歩いている。後十五歩ですれ違う。十歩、八歩、三歩、一歩、（しゅ）、（びちや）、フルミヤは歩き出す。ナイフには血が滴っていて、女は首を押さえて、倒れこんでいた。呼吸だよ、と言う。フルミヤは返り血を浴びていない。ナイフをジーンズにしまづ。歩き出す。女は死んでいる。

帰りに、青果店があった。色とりどりの果実が売られている。林檎が置かれていた。

「こんなものは林檎じゃないよ」

フルミヤは言つ。従業員が首を傾げた。その瞬間に、コインがスだ。

世界は止まる。フルミヤも止まる。オモテはウラに。ウラはオモテに。今はオモテだ。ならば？

ウラだ。フルミヤは、ウラへ行く。

／ウラ東京／ドクター・パンプキンの診察室

ドクター・パンプキンはひどく緩慢な動きでキーボードのエンターキーを押した。モニターに文字列が表れる。フルミヤにはその文字列の意味が理解できない。ドクター・パンプキンはサイズの合つていらないカボチャの被り物を揺らして、モニターからフルミヤの方へ視線を移した。どうっすか、とフルミヤは聞いた。ドクター・パンプキンは答えない。フルミヤの方へ体を向けたまま、またエンターキーを押した。文字列が消える。エンターキー。文字列が表れる。エンターキー。文字列が消える。フルミヤは喋らない。ドクター・パンプキンも喋らない。ウラはオモテに、オモテはウラに。フルミヤは今ウラに居る。しかしコイントスは行われない。そういうものなんだよ。まだなんだ。エンターキーが連打されている。今はまだそれだけの事だ。

／ウラ東京／黒糸ファミリー

黒糸はボスだった。ウラ東京のボスだ。シーハラは珈琲を淹れ、

黒糸の前に出した。黒糸は礼を言わずにそれに口をつける。ボスだからだ。シーハラは部下で、オレはボス。黒糸はウラ東京を牛耳つていた。シーハラ、コインツスはいつだ？ 黒糸は聞く。まだです。先ほど、行われたばかりですから。今回は八十時間ほど、停止していました。シーハラは答える。

「お前は何をしていた」

「パンプキン医師の所に行つて、後は普段通りに」

「やつは何と言つていた」

「あの人は何も言いません。ただ、次のコインツスの準備を」

「そうか、と黒糸は言つた。それだけ。

スピーカーから音楽が流れる。それはクラシックであり、ロックンロールであり、マーチであり、ジャズであり、ブルースでもあつた。子守唄みたいだ、と黒糸は思つ。その棒切れのような、糸のような、細い腕を伸ばしてスピーカーに触る。身体に音楽が響く。血が躍り、心臓が跳ねる。子守唄のようですね、とシーハラは口にする。黒糸は音楽を、その子守唄を感じながら、「そんなことはないよ」と答えた。

／「」

林檎が一つ。

「デリートは許されていない。エンターだ。エンターしか許されていない。デリートは許されていない。プログラムに。プログラムに許されていない。エンター。エンター。エンター。エンター。エンター。エンター。シーハラ、フルミヤ。エンター。エンター。オモテヘ。エンター。デリート? プログラムに許されていない!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6258y/>

オモテ、ウラ、コントス、林檎、南瓜、あるいは、東京の、首都の、首都の

2011年11月20日07時19分発行